

特別賞「日中国交正常化」

服部 龍二氏 中公新書

なければならない、というのが田中角栄の信念であつたようだ。熟慮調整型の大平正芳を外務大臣に据え、幾人もの優れた官僚による周到な準備をもつて、交渉を一挙に妥結にまで持ち込んだその帰結が一九七二年九月の日中共同声明であった。

本書は、同年九月二十五日に北京の空港に降り立ち、二十九日の署名にいたるまでの、押しては引き引いては押し戻す交渉の現場を臨場感をもって描いている。共同声明の文案をどのようなものとするか、一字一句を書きを描写する著者の筆には力がゆるがせにしない双方の駆け引きをもつていている。声明文の一字一句が日中の国益を賭けた外交攻防の結果であつたことがよく理解できる。



平成23年11月13日 每日新聞より

の問題は台灣問題にあつた。日中交渉とは日台交渉であり、日本政界地図が親中・親台の両派に分裂していたことを顧みれば、この交渉は日日問題でもあった。日中が国交を樹立すれば、日台は国交の断絶を余儀なくされる。日台交渉というまことに

【損】な役が回ってきたのが椎名悦三郎であった。きわめつきの難題である。台湾首脳に言を左右にあえて不透明な表現を用いながら、日台関係を最悪の事態に陥れることなきにすませた老練な政治家の姿を、著者は椎名の中に見いだしている。

著者も認めているように、厳しい中ソ対立の下で日中国交樹立を強く希望していたのは、日本よりもむしろ中国であった。日中共同声明における台湾の位置づけが、あの声明文のような形になつたのは、あれはあれで致し方のないことであつたのか。著者はそう考へてゐるのか。もしれないが、もしそうであれば、そういう解釈を現代史家としてもう少しはつきりと解説してほしかったという思いが評者にはある。【評・渡辺利夫】